



## 吉村博（元帯広市長）を想う

### 三津丈夫

誰からも「おやじさん」と慕われ愛された「吉村博」（元帯広市長）。

私との出会いは、昭和三九年、私が帯広市役所に採用されてからである。忘れもしない、採用されて最初に配属された勤務場所は教育委員会である。帯広三条高校を卒業した一八才の若き青年「三津丈夫」は、胸をときめかし勤務についた。

四月の初めと記憶するが、教育長室の電話がリン、リンと鳴る。「はい、教育長室です」。私が電話をとった。「俺だ。教育長はいるか」の声に、「どちらの俺さんですか」と聞いてしまった。すると電話の向こうから、多少の怒りを込めて、「俺といったら吉

村しかいないんだ」ときた。私がまた「どちらの吉村さんですか」と聞くと、「俺、吉村といったら、市長の吉村しかないんだ。早く教育長を呼べ」と言われた。

このやりとりが、吉村市長との初めての会話である。私も悪いかもしれないが、職員の誰もが市長の声をわかっているはずがないとの思いをもって仕事をした。

数年経ち、私は、まわりのすすめもあり、組合活動に足を踏み入れた。

正月、市長宅に集まって酒を酌み交わすのが、年始めの行事であった。私も例にならって参加した。酔った勢いもあり、当時の電話の話をした。「そ

うか、スマンかったな。長くその場にいと、いつの日か初心を忘れ、傲慢になってしまうものだ」と回想していた。その日は、おやじさんと痛飲した。

多くの会話の中から、「三津、まちづくりで忘れてならないことは、難しい話ではなく、子供をかわいがり、お年寄りを大切にすることだ」と、熱く語ってくれた。そのことが、昭和五七年に二九才で市議会に挑戦、今日、道議会議員として活動する、私の基本姿勢になっていると思う。

ある夜、釧路でのこと、私は、仲間数人とともに、山口哲夫さんの市長選挙の応援に出かけた。いわゆるオルグが終わり、居酒屋で、夕食を兼ね一杯ということになった。おやじさんもその店の二階で仲間の市長と夕食をしていて（私はそれを知らなかった）、おやじさんが二階から下りてきた。ホテルに帰るとのこと。その時、「三津、お前も来てくれていたのか。ありがとう」と言いながら、背広のポケットに手を入れ、「今日は持ち合わせこれしかないけど、うまいものを食べて元気出せ」と、たしか八〇〇〇円だったと



記憶している。われわれサラリーマンにとつては大金である。感謝し、親父さんの話を酒の肴に、仲間と痛飲した。後日談で、先輩によると、おやしさんは常にポケットに千円札を入れておるとのこと。われわれ若者に対する気配り、心構えの違いを再認識させられた。

◇ ◇  
「近代的田園都市づくり」を標榜し市長となった、吉村博の市議会での発言を紹介する。

吉村市長は、初選で四つの選挙公約があり、それを行政に反映させることをもって、市政方針とした。

一 ガラス張りの市政

二 十勝二十二町村との緊密な提携  
三 企画室設置による有機的、科学的な構想樹立

四 教育行政の積極化

この基本的な考え方については、三十年八月二十日の市議会で質問に答え、概要を次のように明らかにしている。

第一にガラス張りの市政とは、あいまいな言葉かも知れないが、庁内の空気を清潔にし、市民にいかなる点からも曇りのない、不純のない市政を行いたい。これは私個人の問題でなく助役以下庁員全体が私の意をくみ、いわゆるにこりのない明るい市政を致したい。

第二の十勝町村との提携については、過去の実績においても気を配っているように、十勝・帯広が経済的な基盤の上からも、すでに一体であるという観念の上に立って、将来さらに緊密の度を加え、同時に経済提携をし、相ともに栄える体制を作り上げたい。

第三の企画室設置は、いわゆる市政の方向が個々バラバラであったとはいわないが、さらに今までの市政の上における各課のそれぞれの連絡、あるいは将来帯広の人口が十万、二十万という大都市に発展していくことを想定し、そのためのいわゆる経済的な措置、交通、学校、そうした各方面の計画を綿密に立てて、将来われわれの子孫がよくこの計画に賛意を表してもらえようなものを作り上げるための、そういう

考えの上に立つ企画室を作りたい。同時に市内有識者各位にお願いし、企画協力会といったようなものを作ってはどうかとも考えている。

第四点教育行政の面については、いろいろな事情があつて建築その他に、今まで多少の遅延あるいは計画の不足があつたように考える。これは、何をさしおいても子弟の教育に専念しなければならぬ、尽力しなければならぬと思慮し、教育委員会とよく検討し、これに協力して、将来われわれの子孫から、恨まれることのないような方法を切実にとつていきたい。以上四点が私の今後の市政の上に大きく反映させていきたい根本的な考えである。

このような吉村市長の市民参加のまちづくりの考え方は、帯広動物園、緑の工場公園、市議会を二分しての議論となつた帯広の森構想などの具体化をとおして、今日なお帯広のまちづくりに脈々と思想として流れている。

私は、吉村のおやしさんに薫陶を受けたことを誇りに思うし、これからも活動の柱として行動していきたいと決意する。

ハみつ たけお・北海道議会議員